
学園内最強組織?

飛楽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園内最強組織？

【Nコード】

N9921T

【作者名】

飛楽

【あらすじ】

学園内最強組織の続きのようなものです。ちゃんと続いているわけではないので、他を読んでいなくとも全然大丈夫です。

生徒会を誰も知らないという特異な学園 椎名学園を舞台とした、学園物です。

今回は不良君たちが中心。

ガシャン

鉄錆び臭い宵の路地裏。日が沈んで間もないというのに、周囲に人の姿はない。昼でさえ暗いこんなところに、こんな時間に来るのは一部の不良ぐらいだった。

その線路沿いの一角に少年はいた。

フェンスの方を冷たい視線で見下ろし、唾をはく。

「これで満足か」

「はっ・・・やっぱ勝てないか」

視線の先にフェンスにもたれ息を荒くする少年がいた。

わずかに赤く腫れた頬から二人が喧嘩をしていたことがうかがえる。勝つたらしい立ったままの少年にはほとんど傷はない。

「もう挑むな。無意味だ。・・・こう言われて燃えるのは分かるが、俺に挑むよりその辺のチンピラやってシマ広げたほうが得策だと思うね。」

あんた強いし」

「こんだけボコボコにしといて、よく言う」

少年は自嘲ぎみに笑うと、口元から漏れた血を拭う。

「じゃあ俺のどこ来るか？嫌だろ？・・・まあいいや」

少年はそう言う光の指すほうへと足を向けた。

少年は一人、フェンスに体を預け、目を閉じた。

「番長」

「ん？なんだ」

椎名学園の不良の溜まり場。校舎の影のうす暗いそこに、数名の少年が各々自由に座っていた。その中でも、一番奥の方に腰を下ろしている少年　青野時雨に一人の少年が声をかけた。

「ちよつとこれ見てくださいって、何してるんです？」

「見てわかるだろ、DSだ」

青野はさも当然であるかのように、真っ黒い初期型の携帯ゲーム機をなれた手つきで操作していた。学校に持ってきていいものなのか、甚だ疑問である。第一、高校生がDSと言うのも珍しいんじゃないだろうか。

少年は半分あきれながらも忘れずに本題を切り出す。

「これ見てください」

そう言つて差し出されたのは、縦長に折り畳まれた紙。懐から出すのが一番しっくり来る感じの折り方だ。

「なんだ？」

チラリと視線を寄越して、すぐに画面へ戻してしまった青野に

「読んでくださいよ、番長宛なんですよ？」

と真剣に言う少年。

「ああ、ちつとまった。いまお父さんがな、くちばの父さんがな、店おつきくする金もつて並んでんだよ」

青野はずいぶんと重要そうに語るが、少年にはなんのことだか理解できない。

「いったいなんのゲームしてるんです？」

「『たまごつち』のなんだっけ、お店やるやつ。はじめの方な。妹から借りたんだ」

前회가前回だったので、今回もまさかとは思っていたがやはりと言うべきか。

「またお子さま趣味なものを・・・」

「なんかいったか？」

「いえ、なにも」

幸い少年の呟きは誰の耳にも入っていないようだった。

「おっし！これで店が一段とおっしくなるぞ。で、手紙か？俺宛てでラブレターなら要らないぞ」

「こんな答辞みたいな折り方のラブレターなんてあるわけないでしょ。よく見てくださいよ」

「ん」

言われたとおりにとつてちゃんとみる。手を捻って裏返すと、そこには大きく「青野時雨殿へ 果たし状」とご丁寧に墨で書いてあった。

「果たし状か、久しぶりだな」

少し熱のこもった声色で呟くと、きれいに折られた紙を丁寧に広げた。

中には二つおりにされた紙が一枚。それも丁寧に広げていく。

「・・・なんと言つか、どうします？番長？」

「どうしたらいいんだろうか・・・。無視するのはよくないと思うが・・・これじゃなー？」

困り果てたようなふたりの声に、周りで密かに様子を伺っていた少年達も群がってきた。

「どうしたどうした」

「番長、何かあったの？」

がっしりとした強面の少年と、反対に華奢で色の薄い感じの少年がそれぞれに疑問を口にする。

「いやあ、これ見てくれよ」

青野は二人に果たし状の中身を広げた。

そこにはまたもや墨で、決闘を申し込む、と大きく書いてあった。本当に、それだけが。

「なんだこりゃ。これじゃ相手しようにも、相手が誰だかわかんねえじゃねえか」

「バカなのかな」

二人がそれぞれに感想を口にする。

確かにこれは馬鹿なのかもしれないと、本気で思う。

「あ」

と、薄い感じの少年がなにかに気づいたらしく、声を上げた。

「どうした？」

青野が少年に視線を移す。

「ここ」

少年が、そつと指をさした場所には、小さく丸っこい字で“第二水嶋高校”と書いてあった。

1（後書き）

誤字脱字などありましたら、お知らせください。

2 (前書き)

説明が多くなっていました。。。

「おい、誰かこつちに糊まわしてくれー」

「はい、投げるよ？」

「次こつち」

空中をあちらこちらと飛び回る糊を目の端で追いながら、木村和人は黙々と手元の花紙を開いていた。彼の周りには同じように花紙と格闘している男子が数名、花紙を折る係りにホチキスで留めて端を切る係り、そして和人のように開く係りとしっかり役割分担をして作業している。

「あーっもう！またぐちゃぐちゃなっちまった！」

和人の横で花紙を開いていた親友である梅宮翔は、格闘していた相手である水色の花紙をま上へほおり投げた。ぐしゃぐしゃながらに開かれて花の形をしたそれが、まっすぐに上を向いていた翔の顔面に当たる。

「何やってんのさ」

普段どおり冷たくあしらう。

「翔にちまちました仕事は似あわねーな」

「確かにな」

「お前開くよし切ってる方がいいんじゃない？ぐちゃぐちゃが増える」

「じゃーそうするわー、こういうのは得意じゃないしな」

クラスの男子に言われ、そそくさと移動する翔。

なぜ彼らがこんなことをしているかというと、学校を飾りつけるためである。

毎年、秋に開催される椎名学園学園祭、通称椎名祭。例年の多くの出店やイベントがあり、客足も少くない。この学校の一大イベントといえた。その椎名祭を1週間後に控えた今日、正門の飾りつけと看板作成を割り当てられたこのクラスは、登校してすぐにこの

作業を始めて既に3時間はたとうとしている。

一年生は出店を出さない。

部活としての出し物には参加するだろうが、基本的にそう言うのは2・3年生が行うことになっていた。初めての学園祭ということへの配慮なのだろうが、それを心から喜んでる者などいないだろう。しかし、学園祭を満喫するという観点からみれば、2・3年生よりも楽しめるのは間違いなかった。

だからこそ、個別でない学校全体の準備は一年生に回って来る。

「なーなー？ やっぱ行きてえよなー、な？ 和人もそう思うだろ？」

「え！ なに？」

黙々と作業していたため、周りの話を聞いていなかった。

驚いて聞き返した和人に翔はにやにやと嬉しそうに言った。

「岡本先輩のクラス、カフェするんだってよ！ な！ 行きたいだろ！

！」

「別に」

「なー！？ そりゃないだろー！！」

大げさに驚いて見せた翔は、大きくリアクションを取りすぎて後ろにひっくり返ったしまった。そのアホさ加減を見て周りの男子達が笑いだす。

「和人にそういうこと言ったって無駄だろー」

「そうそ、興味ないんだから」

「男の風上にもおけん。まさかお前彼女もちか？」

「何ふざけたこと言ってんの」

和人はさっきと同様に冷たくあしらうが、表情はさっきよりも柔らかいものになっていた。

和人は特にそう言うのに興味がなくなとかではなく、当人から聞いて知っていたし、『行きたい！』と意気込むほど行きたいと思っていなかったただけだ。彼女も『絶対おいしいから、来てよね』と言わ

れているので行こうとは思っている。

しかし、そのことを彼らに言うことはできない。彼女と和人の繋がり、目に見えないところにあるから。

「そういえばさー、生徒会もなんかするんだってな」

一人の男子が得意げに言った。

「まじで？」

「へー、あ。でも毎年してるって聞いたことあるような…」

「そうらしいよ、恒例の〜みたいな。なにするかは年によって違うけど」

「お目にかかれたりはしないわけ？」

「しないわな。てか、なぜ敬語？」

「突っ込むなよ、ノリだろノリ」

「去年は何したんだ？」

「『ハリー・ポッター』で人間でチェスやンのあったろ？あれ」

「まじで？おそろしー」

「いや、あそこまではしないよ。やられたら退場、みたいな感じ。

自由参加だね、何チームかの対抗戦だったらしいよ」

「へー。詳しいな」

「ちなみに一昨年は『宝探し』なんか校内になんかを隠し . . .

」

止まることなく続く会話を、和人は思考を巡らしながら聞いていた。

この準備で忙しい毎日ですっかり忘れていたが、そういうことをしなければならぬのである。

この学園を仕切るものとして。

この学園には他のどの学校とも違う一つの事柄がある。

それはこの学園での最高機関が、教師でも理事長でもなく生徒会だということ。

詳しく言うと生徒会の中でも生徒会長、生徒副会長男女が実権を握っている。特異な制度だが、もつと特異なのが彼ら3人の姿は、誰一人としてみたことが無いということだ。例えんて言うと、総理大臣の名前も顔も知らない状態で政治を進めているような状態だ。そんな状態を、この学校は何年間も続けている。

そしてその不自然極まりない生徒会の一人が、和人なのだ。

しかも生徒会長ときている。入ったばかりの新生入生に任せる役職ではないが、実際こなせているので問題は無い。

先ほど話題に上った岡本先輩というのも、生徒会のメンバーの一人である。

岡本美香。三年。美人で頭もよく、その上運動神経も抜群。それに気だて良いというチートすぎる存在な彼女は生徒会副会長を務めている。

後もう一人いるのだが、今はおいておくことにする。

とりあえず、そう言った不思議な学園が、学園祭を迎えようとしていた。

2（後書き）

誤字脱字などありましたらお知らせください。

後でしたら

評価や感想等おねがいます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9921t/>

学園内最強組織？

2011年6月14日00時25分発行